史研究 第

第 四 卷

 \equiv

號

昭 和 + Щ 年 ·三月 發 行

唐宋時代に於ける福建の開發

此 野 丈 夫

H

那史上に於いても類例の稀なことゝいはねばならぬ。 代にかけて凡そ百年餘りの間に行はれたのであるが、 うしてこの狀態は平和な北宋時代を通じて益々進められたのであつた。いふまでもなく、この變化は唐末より五 動き始めた樣に思はれるのは唐も大分末に近附いてからのことである。而も宋代になるとかゝる形勢は全く一變 負ふ所も甚だ少なく、その後に於いても文化は微々として頗る振はなかつた。この地方に何となく開化の氣運 した。宋代の文獻に現はれる福建は決して唐代の比ではなく、その發展は誠に刮目して見るべきものがある。さ 早くから開けてゐたのに反し蠻夷の境として永く顧みられなかつた。三國時代の吳の經略や晋の南渡後の開發に 元來福建は非常に開發の後れた地方であつて、宋以後文化に於いても產業に於いても蓍るしく進步したけれど 唐の中頃までは殆んど開發の見るべきものがない。閩越或は閩中とも稱せられ、寧ろ南方に當る廣東方面が かくも短年月の間に一地方の開發が著しく進んだことは支

が

進んで本篇を草する理由は、廣くあらゆる方面からこの間の事情を調査してその開發の跡を明らかにしたいと思 との問題に就いては早く桑原博士が論及されたのを始め部分的には先人の研究も少なくない。 しかし乍ら私が

ふと共に、先人の說き及ばれなかつた點をも補ひたいといふ氣持があるからである。

閩 めて福建二州の名が現はれた。福建と連稱するのは恐らく唐會要諸使雜錄上に「廣德二年九月。以太子詹事李峴。爲江南 新唐書地理志、 [縣の地に泉州を置く。 通典州郡典に據るに唐の武德四年隋の建安郡を建州と改め州治を閩縣に置いた。六年建州を建安郡に移し 景雲二年泉州を閩州と改め泉州を晋江縣に移した。 開元十三年閩州を福州と改めたのでこゝに始

桑原博士の「歴史上より見たる南北支那」(白鳥博士還曆記念東洋史論叢、 が乾元元年の條に見えるけれども確實な根據とすることは出來ない。 八卷一號「唐以前の福建及び臺灣に就いて」)のは誤であらう。尙淳熙三山志(卷二十一)に福建經略使、福建都防禦使の名 支那文化史研究所収)には隨處に 福建地方の

東西及福建等道知選事丼勸農宜慰使。」とあるのが最初であつて、市村博士が興元元年が最初であるといはれた(東洋學報

開發に關する考證が盛られてある。しかしその他には特にこの時代に於ける福建の開發を專門に論じたものはない様であ る。昨年十一月東洋史談話會の席上で北山康夫氏が偶然にも本題と全く同じ談話を試みられその概要が本誌前號に掲載さ

れてゐる。

兎も角後漢の末になつて始めて閩江の流域に郡縣が置かれたことは嶷なく、三國をへて晋の南渡後次第にその敷 當るかどうかといふことさへなほ疑問に屬するのであつて、今に論爭が繰り返へされてゐる有樣である。 の古代の歴史は頗る明らかでない。 それ以前はもとより漢代に閩越とよばれた地方が果して今日の それは に福建に

地の太守縣令となつた人の傳を讚んでもたゞ土民の叛亂が絕えないことをいつてゐるに過ぎない。朱の王象之の①

しかし六朝時代を通じて福建の狀態は依然雲煙の中に閉されてゐる。

時たまこの

を増して行つたものと見える。

- 2 -

В たその地。 **蠻族と考へられてゐたに相** るらしく文帝の時には一族が悉く宗室に編入せられたといふ。しかしやはり彼等は中原の人々からは文化の低 姓たり。」とあるのが最初の記事であらう。この陳氏は餘程有力な土豪であつたとみえ、陳の建國にも關係してゐ 名跡晦如たり。」などゝ記してゐるが大した根據がない。もとより永嘉の亂に中原の仕族が南に徙りその影響が 奥地紀勝には圖經を引いて、「晋の永嘉中衣冠闖に趨く。 これより亂を畏れまた仕ふる者なし。故に六朝の間。 Ø 地方にも及んだのは當然のことであつて、これに關する傳說も古くからある。③ のが先づ閩に入つたといはれてゐる。 皆夷種。 五姓あり。 :遠ない。太平寰宇記には開元錄といふ書物を引いて「闖縣は越州の地。 林黄はこれその裔なりといふ。」といつてゐるではない 聞の四姓に就いては陳書陳寶應傳に、「晉安候官の人なり。 中にも林、 力。 黄、 陳 今の建州もま 世 鯫 . 女閩 の 囟 中 仕官 姓 Ó 四 ح O

民悍にして俗鬼なり。洞砦にをり桴筏を家とするもの華言と通ぜず。」とのべてある。 の餘。」とあるし、それから百年餘りもたつた元和の頃の人である劉禹錫の文にも、「闐は負海の つた上奏文には には未開 疊して外界との交通を絶たれ、政治的には勿論經濟上に於いても中央との交涉は少なかつた。從つて山間 ح の地方がいつまでも開發が後れたのは全く地勢の關係によるのであつて、東は大海に迫り西北南共に山 の民が多く、 「況んやこの鎭は七閩を極め境は百粤に連る。 唐代の福建は殆んど貶謫された官吏の赴任地であつた。垂拱二年陳元光が漳州 左袵椎髻の半ばに居り、 耕すべきはすなはち火田 の饒あれどもその の建置を願 海濱

てゐたが、 州四縣に比べると格段の差があるといへる。 とはいふものゝ唐代には郡縣の數も漸く增加し元和郡縣志によると五州二十五縣を數へるのであつて、隋志の この時代になると今まで顧みられなかつた山間の地にも置かれる樣になつて來る。 從來州縣が置かれたのは主として閩江の流域や海岸地方に限られ 新唐書地理志をみ

勢が ると、 建出身の宦官が非常に多くその勢が甚だ强かつたことである。の なつた。 末に近づくと共に次第にこの地方の資源が開發されて來た。茶鹽の利が人々の注意に上り、 福 進したことを述べ、「諸道每歳閹人を送る。 世から非常な尊敬を受けてゐる常袞が觀察使となつたのは建中年間であつた。 の財賦を悉く東南に求めなければならなくなつたといふ樣な事情が大きな原因をなしてゐるのである。 の開發に影響を興へたといふことも見逃してはならない。 を以て大閹以下桑梓多く閩にか 建 自 意すべきことである。 Ō 各地で頻 人 然 北 K 支那 四 が强制的に宮刑を施され朝廷に上られた由來は更に古い。 方に及んだ結果ではあるが、 の戰禍を避けて僑寓する人士も年と共に多きを加へたであらう。 りに塘坡が開鑿され漑田の増加して行つた消息が窺はれる。 彼等宦官が京都と故郷との間を頻繁に往來したであらうことが、 7 る。 時に以て中官の藪澤となす。」とある。 いはゆる私白なるものは閩を首となす。 特に安史の亂後に於ける戶口の南遷や、 唐代の玉泉子といふ書に、 穆宗の皇后蕭氏が閩人であつたといふこと これは勿論唐 これは咸通時代の ح なん 福建の文運を開いた人として後 且任用せらる」こと多し。 北支那の藩鎭獨立の爲に朝廷 河白い 杜宣猷が宦官の力で陞 の國力 鑛山 少なからずこの地方 O は唐 狀態であるが、 Ø が 開鑿が頻繁と 充實し の 中期以後福 從つて唐 開 故 0

弟審 その 軍 節度使を授けられた。 知の努力によつて治安は回復し、 かしながら特にこの地力が著るしく開發されるのは唐末王氏がこゝに據つて閩國を建てた時からであらう。 王 潮 人烟を絶つたといはれてゐる。 が関 に入つたのは光啓元年のことであるが、 當時支那は殆んど黃巢の軍 北方には未だ戦亂が續いてゐるのに數十年の間平和が維持せられた。 福建も乾符五年一度は黄巢の馬蹄に蹂躪せられたけれども、 ・に席捲されて至る所荒廢に歸 六年を經た景福二年には五州を手中に收め乾寧三年威武 į 殊に江 淮以北 は極目 一千里蕭

審

知

、から三代目の延鈞は始めて國を閩と號した(長興四年)。

その後一代をへ延羲の時になつて建州刺史であつ

何にこれを傳へてゐるであらうか 開發を後らせた交通の不便は却つてこの地を戰火より救ひ文化向上の誘引となつたわけである。 當時の記錄は如

德政 楊沂 言を弄したものとばかりは考へられぬ。 が從つて來た樣である。 易の利に着目してこれを奨勵したことを傳へてゐる。王潮が王緒の部下として聞に入つた時には已に多數の流賊 Ÿ 継いだ。 ţ が 建てさせ名士を保護してゐたのである。 0 .કે. ૦ からをる。 |記事は共に于兢の瑯琊忠懿王德政碑や錢昱の忠懿王廟碑に基いたのであらうが、 :次第に港として繁榮して行つたであらうことが想像せられる。 王潮に就いては資治通鑑悉二百 の致す所となし號して甘棠港となす。」とあつて 北方知名の士を優遇し學校を興して文運の開發に力め、 海中の蠻夷商賈を招來す。 は唐相渉の從弟。 五代史記閩世家にも、「審知盜賊より起るといへども人となり儉約。禮を好み士に下る。 好みを隣道に交へ境を保んじ民を息はしむ。 王審知には隨分美談が多い。 良吏を選任し刑を省き費を惜しみ徭を輕うし歛を薄うして民と休息す。 三十年の間一境晏然。」とい 徐寅は唐の知名の進士。 平和が續くと各地から流れ込む農民や商工者は夥しい數に達したであらう。 海上黄崎波濤阻をなす。 に、「関 舊五代史本傳には「審知隴畝より起り以て富貴に至る。 こんな有樣であつたから人口も餘程增加し諸々の産業が興り福州や泉州 審知の兄たる泉州刺史審邽も新唐書本傳によると、 地ほど定まる。 皆審知に依つて仕官す。 閩人安んず。」とある。 一夕風雨雷電震擊開いて以て港となす。 潮僚佐を遣はして州縣を巡り 學を四門に建て閩土の秀なるものを教 潮は乾寧四年に死ん これ等の碑文は徒らに誇張 農桑を勸め租稅を定めし 子の延郴に招賢院を 王淡は唐相溥の子。 で 毎に節儉を以て自 弟 閩人以て審 の審 新舊五代史 知 が後を 知 貿

た兄の延政は獨立して殷國を建てた(天福八年)。吳越はこの機に溗じ闄國を滅して福州を合せ、 泉漳二州が留従効の下に半ば獨立の狀態を續けた。留從効が二十年の間泉州に據つた結果、(① 南唐は建 この港は一 段と を奪

發展を遂げたであらう。

時代に於けるこの地方は如何なる形で我々の前に現はれるかを見よう。 つた。 B け 貿易を奬勵し中原の士を招いて學術に産業にあらゆる方面の開拓に力め國力の充實を計つたといふ點に注 なかつたであらう。 れを楊剝皮といふ。」といはれる程であつた。 ず。 てゐる。 起らなかつた、 れば 褔 後世園國 楊思恭聚歛をよくするを以て幸を得たり。 建州 0 ならぬ。 如き未だ開拓の充分進まなかつた地方は彼等の力に俟つべきものが多かつたに相違ない。 の苛 に國を建てた殷に至つては一層甚だしく、 然るに王氏が區々たる數州の地を以て國を建て極端な收斂を行つた爲に民力が涸渇した、 酬 王延鈞の如きは奢侈に耽り神仙術に惑はされて盛に土木を起し薛文傑を國計使に任じて歛財を行 人々は流徙の苦痛を忍んでも戦火に荒らされない平和な天地を求めて移つて來たであらう。 な誅求を非難する人は多い。 特に閩國が甚だしかつたとしても、 しかし相當の誅求は五代の如き亂世にあつては 何れの國にも覓れ 明の黄仲韶は八閩通志十二に、 田畝山澤の税を増し魚鹽蔬菓に至るまで倍征せざるなし。 資治通鑑卷二百 この地方は從來開發が後れ物産にも乏しかつた爲に外國 に依れば、「殷國小にして民貧、 唐代には未だ開發が進まず産業も 來るべき次の 軍 旅 といつ 意しな 國 況ん やま 人と

註 ① 梁書卷三十九羊侃傳、同卷四十二贓厥傳。

- ② 別、ばな平甲寛の百七十二発表② 奥地紀勝卷百二十八福州の條。
- (3) へば太平御覽卷百七十に梁載言の十道志を引き一泉州清源郡。 因立晋安郡。宋齊以後因之。唐景雲二年置泉州。」とある。 土地與長樂同。 東晋南渡。 衣冠士族多萃其地。

にしても福建程その變化が著るしい地方は少ない。

- 4 太平寰宇記卷百福 州の條。太平御覽卷百七十にも同文を載せ夷種を蛇種に作る。
- ⑥ 劉夢得文集卷二十九「福州團練薩響神道碑」

多いことをいつたものであらう。

(5)

全唐文卷百六十四一請建州縣表

- 7 二十二史劄記卷二十「唐宦官多閩廣人」の條參照。又唐の裴庭裕の東觀奏記卷下に于延陵が建州刺史に除せられた時宜 宗が延陵にいつた言を載せて散前後左右皆建人也。」とある (通鑑大中十二年十月の條參照) が、思ふに闡出身の宦官が
- 8 これは有名な話で新唐書宦者傳上吐突承瓘傳にも通鑑咸通六年正月の條にも見える。私白の意義については桑原博士が 曾我部靜雄氏が桑原說を支持された。(歴史と地理二九の五「私白宦官の意義」)、 自宮の意義に説かれ(東洋史説苑所取「支那の宦官」)、清水泰次氏之に反駁し(史學雜誌四三の一「自宮宦官の研究」・ 又桑原博士支那法制史論叢所收「唐明
- 9 王審知に關する新舊五代史の記事は何れも于兢の瑯琊忠懿王德政碑(全唐文卷八百四十一)と錢昱の忠懿王廟碑 (全唐文 七史商権卷九十七「王審知事蹟」、常盤博士「支那佛教史蹟記念集」及び同評解參照 **卷八百九十三)に基く。共に彭元瑞の五代史記注にも收められてゐる。前者は舊唐書哀帝紀天祐三年の條に見える。十**

律の比較」閹割火者の條參照。

- (10) 黃滔御史集卷五「丈六金身碑」には天祐四年審知が福州開元寺の丈六金銅佛の開眼供養を營んだ時、 方の名士の名を上げてゐる。 列席した多數の北
- 留從効も善政を布いたらしい。 延納名士。部内淸治。吏民愛之。」とある。 路振の九國志卷九(粤雅堂叢書本)には「從効起自行陣。 知人疾苦。勤儉養民。常衣布。

11)

=

計に就いて見てみよう。 以上唐より五代にかけての開發の經過を簡單に述べた。その結果は如何に現はれて來るか。先づこれを戶口統 唐の中頃 から宋にかけて北支那の戸口が夥しく南に遷つたのは周知の事實である。 それ

次に唐の開元より南宋に至るまでの戸敷を上げ丼せて全國戸

「朱代の戸口を論じて世漏が多く天下の合計を出漏が多く天下の合計を出縣志と寰宇記との開元の	は加藤博士の「朱代。元和志は脱漏が名。大體元和郡縣志し	巳むを得す舊唐書に依つた。天賓元年の新唐書地理志の合計は加藤博士の「朱代の戸口を論じてせるが福建に關する限り合計に大差がないので便宜上さうした。元和志は脫漏が多く天下の合計を出郡縣志によつたが汀州を缺いてゐるので太平寰宇記で補つた。大體元和郡縣志と寰宇記との開元の郡縣志によつたが汀州を缺いてゐるので太平寰宇記で補つた。大體元和郡縣志と寰宇記との開元の		とが出來ないので已むを得ず舊唐書に依つた。は非常に出入があるが福建に關する限り合計に開元の戶數は元和郡縣志によつたが汀州を缺い	とが出來ないのでは非常に出入があ*開元の戸數は元和	
O,1二六	同 上	一二六七、六八〇一	所引 國朝 會要	一五九、九二一四	嘉定十六年	
〇, 一 五,	同上卷百八十七	一五七、五七三三(三十年)	要錄卷九十六	一三三、餘(五年)	紹與中	
0,04=	同上合計	一六四九、九三一三	元豐九域志	一〇四、四二三五	元豐元年	
0,0六七	上	一四八五、二六六八	所引 中 書 備 對 文獻 通考卷十一	九九、二〇八七	熙寧十年	
0,041	同上合計	六四九、六五四一	太平寰宇記	四六、七八〇八	宋 太平與國中	
0.011	唐會要卷八十四	二四七、三九六二	元和郡縣志	七、四四六七	元和中	·
0.01	同上合計	八八三、七一八五	新唐書地理志	九、五五八六	天寶元年	
国 1 0,0	舊唐書地理志	八四一、二八七一 #	元和郡縣志	一、五三一一	唐 開 元 中	
上 全 國 に 對する	出典	全國の戸數	出典	福建地方の戸数	年代	

とかけ來ないので已むを得す舊唐書に依つた。天寳元年の新唐書地理志の合計は加藤博士の「朱代の戸口を論じて其の前」 を出すこ 元の戸口

外國貿易の發達による戸口膨脹の結果である。更に百年を經て熙寧元豐時代になると戸數は益々增加して百萬を

後の變遷に及ぶ」(東洋史講座卷十四)に依る。

* ない六卷の分をも加へて計算した。熙寧十年、 太平寰宇記の皇朝戸は甚だ粗雑で兩断路の如きは餘りに少なすぎるのであるが、 計」(史學十二卷三號)に依る。 あり、簑宇記の二州の戸合計十五萬五千二百八十八と大差を認めない。簑宇記の全國合計には古佚叢書に收めた通行本に 何となれば、 綾資治通鑑長編太平興國三年四月に泉州節度使陳洪進が漳泉二州の戸十五萬一千九百七十八を獻じたと 元豐元年の年代考定及び九域志の全國合計は加藤博士の「宋代の主客戸統 福建に關する限り 大した誤は ないと 思

南方では寧ろ增加してゐる所さへあるのは、いふまでもなく南支那が戰禍に見舞はれること少なく、比較的生活 流民も多かつたわけで、「五方の俗を備ふ。」とさへ稱せられてゐる。 五代に(南)劍州を、 てゐる。 は四十七萬に近く唐の盛時に比して五倍といふのは驚くべき飛躍である。全國に對する比率も十三分の一に迫つ 國中の戶數が全國的に增加してゐるのは戶籍の整備した結果であらう。それにしてもこの時に於ける福建の戶數 く、この傾向は唐末に至るに從つて益々著るしくなつて行つたことゝ思はれる。 數合計に對して三十分の一弱の比率を保つてゐることは、實際に於いてこの地方の戶口は增加したものと認むべ も安定してゐたので北方より流徙して來る人口が多かつた爲である。 ない。安史の亂後樣々の理由から統計に現はれる天下の戶口は激減した。その度合は北支那に於いて著るしく、 これに依れば唐代福建の戸敷は開元天寶の盛時に於いてさへ十萬を上下し全國に對して僅か百分の一强に過ぎ 如何に人口 太平興國五年に邵武軍を分つた。 の増加が多かつたかどわかるではないか。 この州は浙江江西と堺を接してゐる爲に各地から入りこむ 州縣の數も八州軍四十五縣に上つた。 泉州が太平興國四年興化軍を分つたのは、 福建地方がさ程の減少を示さず、天下の戸 太平寰宇記に見える宋初太平興 特に建州 は

城は何れも北宋末に於ける全國有數の大都會であつたのであらう。南宋になると淮水以北の地を失つたので、そのは何れも北宋末に於ける全國有數の大都會であつたのであらう。南宋になると淮水以北の地を失つたので、そ れだけ福建の全國に對する重要度は增したわけで愈々戶口の數が增加したのも當然の勢であつた。次に文化や産 突破した。元豐九域志に依れば福州や泉州の戸敷は二十萬以上に達し、建州も十八萬を越えてゐる。これ等の州

業の開發狀態を一瞥しよう。

註 (<u>1</u>) 八閩通志後三に建安志を引いて、「自五代亂離。江北士大夫豪商巨賈多避難于此。故備五方之俗。」とある。 新唐書地理 志によると天寶元年の建州の戸敷は二萬二千七百七十、太平寰宇記によれば、建州九萬四百九十二、南劍州五萬六千六

2 九域志に依つて戸數二十萬以上の府州を上げると、開封府、京兆府、 洪州、 百七十、卻武軍四萬七千八百八十一、合計十九萬五百四十三。更に元豐九城志では三州軍の戸敷合計五十萬に達する。 い。福建路に於いては汀州、 初武、興化の三州軍を除いた五州軍は戸数十萬を越えてゐる。 吉州、 潭州及び福州、 泉州の七に過ぎな

四

から他は推して知るべきである。從つて官吏登用試驗も嶺南や黔中と共に南選が行はれたこともあつた。福建で もたつて貞元七年泉州の林藻、 は神龍元年登第した福州の薛令之が最初の進士といはれてゐるが、その後續くものが絶えてなく漸く八十年餘り らざるなり。」とある樣に全く教化の及ばなかつた爲である。 の梁克家の三山志卷二に、「唐神龍より後唐の天成にいたるまで二百二十有三年。 この地方の文化開發が唐末に至るまで遲々として進まなかつた有樣は進士の數を見れば最も明白である。南宋 何ぞ才の難きや。あにその出づるに時あるか、はた山川風土の然らしむるか。そも~~教化涵養のいまだ至 翌年には同州の歐陽詹が相次いで及第した。これは大曆七年福建觀察使となつた 福建の中でも最も開けた 福州がこの狀態であつた 進士に擢んでらる 4 君 三十六

嘆じてゐる程ではないか。 ③ 下と號す。こといふ記事がある。 でなく、泉州の莆田縣の如きでさへも賛寧の宋高僧傳には「その邑唐季衣冠の士の僑寓多く、④ を興し教化に力めたことは前述の通りであるが、その結果各地に學問が起つた。 又大した人物も出てをらぬ。 進士も出る樣になつた。しかしながら試みに八閩通志によつて唐一代の進士の數を見ると僅か五十七人に過ぎず 李椅や、建中元年に觀察使となつた常袞が學問を奨勵した結果である。獨孤及の福州都督府新學碑銘毘陵集 あづからしむ。 らず。袞至つて爲に鄕校を設け文章を作爲せしめ親から講導を加ふ。 「閩中儒家流なし。成公(李椅)至つて俗易る。」とある。常袞に就いては新唐書の本傳に「始め閩人いまだ學を これより俗一變し歳貢の士內州と等し。」とあり、 唐末北方名士のこの地に避難するものが多く、王氏がこれ等僑寓の士を優遇して學校 南宋末、 福州の陳普は勉學詩を作つて「人をして唐書を讀むに忍びざらしむ。」と 最後の一句は誇張に過ぎるが ともに客主となつて禮を釣しうし觀遊燕饗 福州や泉州などの中心地ば 儒風振起す。 この頃から漸く 小稷 には <u>ታ</u>ኔ

卿は反對黨から常に福建子の綽名を以て呼ばれた程或意味に於いては福建の爲に氣を吐いた人である。 法黨を代表する呂惠卿、章惇、蔡京といつた人々が福建出身者であつたことは特に注意しなければならぬ。 は彼等をして自由に手腕を振はせることが出來た事情ではあるまいか。 に多いことを指摘してゐる。吳育、曾公亮、 つた。三山志をみても宋朝に至り彬然として人物の輩出したことをいひ、 に文化 かくて培はれて來た文化の種子は宋代になると一時に芽を出したかの觀がある。進士の數も年を追つて多くな が新しい為に、 人々は進取的で因襲に拘束されず、 陳升之、吳充等の如く宰相の位に上つた人も少なくない。 又中央にも有力な先輩がゐなかつたといふことなど これは後にのべる新興の學問である道學 科目を以て進むものが建中靖國以後特 思ふに福 中にも新 呂惠

などと合せ考へねばならぬ 宋になると道學が榮え天下の學生が歙然としてこゝに集つたことや、當時の應舉者の數が天下無雙であつたこと つた杭州 南宋になると益々盛となり、 出版とは密接な關係がある。 ح 末に出た楊時を始め、 す。」とあるのも南宋に關する限り過言ではない。 引して臺省に居るもの卿相を歴て世に絕たず。 といはれ人物は踵を接して現はれた。八闖通志キ☆に、「宋興り闖八郡の士名第を取ること芥を拾ふが如し。 カ と共に中原の名族の南してこの地に入るものが多く、 「の地は永く道學の淵叢となり、學界に大きな影響を與へたことは更めていふまでもない。 ら出た人である。 隆盛についてもいへるであらう。 「本朝第一」 譜卷六 や成都 が文化の中心であつた樣に、 神宗の熙寧 游酢、 と推賞せられる蔡襄、 建陽縣 已に北宋の末から閩版の書物が天下を風靡してゐたことは著るしい事實で、 胡安國、 九年には興化軍から文武兩魁を出して天下を驚嘆させたことさへある。 『の麻沙、 歐陽脩から「眞に一代の文豪なり。」錄上と賞讚せられた楊億や、 王頻、 福建もまたその一中心であつたことを物語るものであつて、 崇化兩坊は圖書の府とさへいはれた。 陳瓘等何れも福建出身者であるが、 更に北宋詞壇の第一人者といはれる柳永なども北宋時代に ·天下を擧げて 第を得るの多きをいふもの 殊に學界に於いては道學の代表的碩儒が輩出 爲に文化は益々開發された。 朱熹が建陽に晩年を送つてか 登第者の多いことは天下無比 このことは當時出版 必ず園を以て 學問の普及と書籍の して ゐる。 叉能書を以 首稱とな 宋 この の盛 殊に それ の南渡 であ 北宋 相 地 南 が 方

を見ても閩中出身の僧は元和、 に入ると急激 教が興るの にその數を增 もまた唐末からである。 大和 吳越が短 の頃から現はれ、 三山 年月 1 志卷三三 の 間に に福州では宣宗の頃 唐末五代にかけて特に多い。 層 多くの寺を造つたといつてゐる。 から漸く佛寺の建立が盛になり、 この 地方の文化がこれ等僧侶 宋高僧傳((特に 1神智部 王氏が

閩

せられ、 あつた事と共に注意しなければならぬ。 b 本、 を極めたので、この頃から誅求が激しく行はれる樣になつた。それは兎も角福州や泉州は五代以來佛國とさへ稱 を度して僧となす。 王審知であるといつても過言ではない。 程度の低かつた閩人を教化するのに宗教の力を藉りる必要を認めたからであらう。實際福建の佛教を開いた人は⑥ 重んじた王審知に Ø Ø 大藏經が開板された事實も容易に頷き得るではないか。 に、「閩王延鈞民二萬を度して僧となす。 を始め神晏、 手 |高弟師備(共に閩人)を尊敬し頻りに財を捨てゝ寺塔を建立したことは黄滔御史公集悉や 忠懿王廟碑に 義存は福州の雪峯山にあつて數百の弟子を擁し禪學の一權威として閩浙の間に敎化を布き、 に依つて開發されたことも無視することが出來ない。王氏の佛教信仰はどうであつたか。王審知が義存とそ しかもそれが主として民間で計畫され信者の寄進に依つて完成されたといふ事は當地の彫板業が最も盛んで 二は政和 北宋の天禧の頃には江浙福建の僧尼の數は天下に半ばすと傳へられてゐる。北宋時代已に福州で二種の⑩ 慧稜等の高足が現はれた。 より南宋の初めに亘つた開元寺本である。 して華麗な堂塔や佛像を造り金泥の藏經を寫して佛教を獎勵した理由は、 民重賦を避けて多く僧となる。凡そ萬一千人を度す。」五年七月 中にも師備は福州の玄沙院に住し審知の厚 これより閩中僧多し。」後唐天成三 更に園國の諸王は皆佛敎に心醉して僧尼の保護に力めてゐる。 即ち 一は元豐より崇寧にかけて 完成された 殊に前者は宋板の藏經として 蜀板に次ぐ 古いものであ とあり、 二代後の曦に關しても い歸依を受けた。 と見える。 やはり當時未だ文化 かくて佛事は豪奢 その門に 東禪等覺院 平生倹約を 資治通鑑 くは は師 一叉民 備

註 1 2 歐陽詹には韓愈に「歐陽生哀辭」があつて有名であるが、これ等唐代の福建の人々の傳記は唐末の人黃璞の閩川名士傳 桑原博士 「歴史上より見たる南北支那」備考二十五。

- 3 道光福建通志卷五十八。 に收められてゐた筈である。
- 4 宋高僧傳卷十三 「梁撫州曹山本寂傳」
- (3) 興地紀勝卷一百三十 寧九年武舉第一。時徐鐸亦進士第一。 Ŧ. 神宗御製の詩をのせて「一方文武魁天下。萬里英雄入彀中。」とあり、これに註して、「薛奕熙 神宗御製詩賜之。」といふ。
- 7 6 內藤博士 義 「存の傳は宋高僧傳卷十二、 「宋元板の話」(東洋文化史研究所收)、長澤規矩也氏「宋板の話」(昭和八年五月宋刊本展覽會陳列書解説附錄) 師備は同卷十三に見える。義存のは「福州雪峰山故眞覺大師碑銘」(黃滔御史公集卷五) に

悲く。

- 8 と稱してゐる。 國立中山大學語言歷史研究所週刊第七集第七十六期以下に魏應鱗氏が「五代閩史稿』(未完)を書き「宗教與神語」とい ふ章に王氏が代々盛に佛寺を建て彼等の傳記が神話化されてゐることを說き、これを福建文化の過渡時代の特徴である 閩國の佛教に就いては常盤博士「支那佛教史蹟記念集評解」に詳しい。
- 9 興地紀勝卷百二十八福州の條所引陳師尚賀徐中丞啓、「三山鼎峙。疑海上之仙家。千刹星聯。 實人間之佛國。二方與滕寶

総十二泉州の條一五季以來實共推於佛國。」

- 11) 章如愚 會經濟史料」(東洋學報二十五卷二號)に指摘されてゐる。 「山堂考索後集」 卷六十三。 福州の寺田が民田に比較して多いことは青山定男氏が「朱元の地方誌に見えたる社
- (1) 常盤博士「支那佛教史蹟記念集評解」一九六頁。藏經彫版に關する宋代の記事としては三山志卷三十三東禪院の條に「崇 - 二年因進藏經加號崇寧萬歳…有大藏經版」とあるのを補ひ得る。 開元寺の條には關係記事がない。

五

味極めて佳し。」 とある。 b ŕ 宋 代 福 建等十二州を上げて「福州は閩の方山に産す」と注してゐるが「未だ詳かならず。 の 福 一建に就いて忘れることの出來ぬのは茶の産出である。 陸羽は貞元末に死んだ人であるが、 當時福建の茶は彼の樣な斯道の達人にも餘り知ら 唐の陸羽 の茶經 には全國 往々これを得ればその の茶の産 地を説 き 終

K

は

は播自 K れてなかつたのであらう。 は穆宗の長慶元年鹽鐵使王播が天下の茶税を増した時のことをいひ、 からこれを領す。」とあつて、 しかるに唐國史補卷 この時代になると産額も殖え その名をも知られる樣になつて來たことが ·K は 「福州方山之露あり」と已にその品名を上げ、 「江淮、 浙東西、 嶺南、 褔 新唐書食貨志 建 荆 襄 の茶

る。

なす。 ものたることが明らかである。 大昌は蠟を正しいとなしてゐる。兎も角唐六典、① 唐書地理 の條に、「七月丙申勅す。 が宮廷の御用に供されたのは有名な事實である。 しく停むべし。」とあるのが最も早い。 宋代 忠蓋を嘉すといへども伏して煩勞を恐る。 ĸ 志福州 は福 建 の土貢には茶と橄欖が上げられてゐる。 Ø 蠟 面茶とい 福建毎年橄欖子を進む。 ふものが最も良質の茶として貴ばれた。 太平寰宇記には福州、 臘面茶は福建の特産であつて、 今後はたゞ臘面茶のみを供進せよ。 通典更に下つて元和郡縣志の貢賦の條にも茶が見えない このごろ閹豎閩中より出づ。 蠟面茶の名は唐末から 建州、 これは先の舊唐書の文を参照しても唐末のことを記した 南劍州、 汀州(邵武軍は土産建)の土産に茶とあり漳州 北宋の初 字は蠟(幭)、 記錄に 嗜好の間に牽かれ遂に貢奉の典 から製法も改良され就中建 見える。 **嬴等にも作られるが宋** その橄欖子を進むるはよろ 舊唐書哀帝紀天祐一 Ø 州 'n の茶 K 二年 程 新 ٤

る。 だ南唐にあつては製茶の技術も頗る發達し、 た翌年の保大四 Ŧi. 陽美の茶を貢するをやむ。」とある。 代閩 國 の 治下 年二月の條に、 K あつた時から已に建州では優秀な茶を産した樣である。 「建州に命じて的乳茶を製せしむ。 陽美とは常州義興縣のことで唐の上供茶の産地であつた。 研灣とか宋代になつて最も貴ばれる龍、 號して京挺といふ。 馬令の南唐書浩 鳳とかいふ茶も已に作られ **﨟茶の貢これより始ま** には 南 唐が建州を下 文雅を好ん

祐 等 祐三年には建 主として建、 て京挺、 皇朝類苑岩六に楊文公談苑を引いて「江左近日뼳面の號あり。 は宋史食貨志にも、 苑茶が最 良を加へて益々精巧な茶を作り名品が相次いで出たことは、 唐 てをつた。宋代帝室 百萬斤、 の品 四年通商法 0 制 に倣つて北苑を供御の茶園と定めて以來建茶の名は天下を風靡した。 として御飲に供せられたが、 南劍州は二十餘萬斤であつた。綾三百四十九 的乳、 も精絶の域 州 南 が行はれた時にも蠟茶のみは例外として禁権によつた。③ 及び骨子等といふ。 のみでも七十九萬斤に達した。 劍 の二州であるが、 「以て歳貢及び邦國 に達したのは恐らく自から大觀茶錄を作つた程の風流天子徽宗の時であつたであらう。 の御用茶を製した建安の北苑といふ有名な茶園も南唐の時に始つたのである。 仁宗の 咸平中轉運使となつた丁謂、 每歳五六萬斤に過ぎず。 の用に充つ。」とあり、 天聖元年の歳課は三十九萬餘斤、 貨宋 志史 食 元豐七年には轉運副使王子京の言に依ると年産 當時の茶錄や筆記類にしばら 今歳に訖つて三十餘萬斤を出す。」とある。 李氏別にその乳を取つて片を作らしむ。 特別の扱を受け私販の禁も他の茶より嚴重で、 天聖中の蔡襄、 從つてその産額も年々増加した。 初は 同九年には五十萬斤續後百九十 たが龍、 熙寧間の賈靑等何れもこれ 鳳 記されてゐる。 種 O 團 宋の 額建 茶 太宗が 或は號し が最 江少虞の 州 長 蠟茶 に改 8 1-地 北 嘉 嘉 は 南

ねるのは、 引用 朝時代か ゐる記事 された **燃や木棉などの重要な特産物も記してをく必要がある。** ら製造されてゐたが、 事がある。 この地方の甘蔗栽培の起原が相當に古く白砂糖さへ作られてゐたといふことは製糖技術の甚だ進步し 仁宗の頃の人である蘇頌の圖經本草に、 溯つては太平寰宇記 福建で甘蔗を産する確實な證據は宋代になつて始めて現は の福州や泉州 泉福吉廣の諸州では甘蔗が栽培されその の土産に甘蔗があり、 甘蔗は南支那では古くから栽培され砂糖も已に南北 福州には尚、「乾白沙糖貪」と記して れる。 汁から沙糖を製造 大觀本草卷二 K

ح

地方では宋代に著るしく鑛業が發達した。

續資治通鑑長編卷七 に天禧五年現在の天下の鑛產州軍名を列

用する砂糖は全部福州附近から供給され、その量は金額に見積ると莫大な敷に上ると稱してゐる。⑤ を經て元になると福建の製糖業は盛大を極めた樣である。 てゐたことを示すものであらう。 叉南宋の王灼の糖霜譜に依ると、 元初この地を旅行したマルコ・ポーロは當時宮廷で 當時この地方では糖霜が作られてゐた。 南宋

北方に くし **貧を憂へずに活して行ける、** ゑ の謝枋得の疊山集窓に、 木棉 北 たものだとい 移植される樣になつたのは元初からのことである。 宋末 樹 の栽培は唐代嶺南や四川では の方匀の泊宅編や ふ意味の詩がある。 八闉の地は蠶桑のことには適しないけれども木棉といふ天産があつてそのお蔭で農家も 極く隣接せる江南の饒州や信州では養蠶は盛だが木棉は全く産しない、 にこの地方で木棉樹が栽培されこれから吉貝布 これに依つても福建 已に行はれてゐた樣であるが、 の木棉は宋末まで重要な特産物であつたわけで、 **閩に關してはやはり宋代から** が織られることを傳へてゐる。 記錄 天道はうま KC その 南宋 見 Ż

子-新 僕視すべきであるといひ、 て、 唐代には閩 ら蜀と嶺南とが知られてゐた。 は天下第一の稱を得て士大夫の間に賞美せられ、 しい地方から出る樣になつたことを論じてゐる。 そ 就中興化軍の海岸に産するものは最も質がよく莆田茘子の名を恋にした。 他荔子だとか橄欖子だとかいふ菓實も宋になると俄然福建のものが有名になる。唐代では荔子といへば專 の荔子などは全く知られなかつたが、 時代の進むと共に未開の地が次第に開拓されて優秀な産物のみならず、 しかし宋初の陶穀の凊異錄11には「嶺南の荔子もとより閩蜀に逮ばず。」ともあつ 今では関 蔡襄は茘子譜を作つて閩産の有名な品目を列擧した。 宋代では茘子といへば直ぐに閩中を聯想する程であつた。 の品 は最も奇妙で蜀の 南宋の羅大經の鶴林玉露燈に 80 は これ に比すると香味共に 人物もこれ等 閩の荔 は

に戯の條 各州郡 た中に、 泉州、 の土貢の條にも元和郡縣志にも福建に關しては一も鑛物の記載がな 福、 建、 興化軍を除けばこの路は非常に鑛産物が豐富であつたことがわか 漳 丁銀の條に河 南劍、 邵武の 六州軍は銀、 鋼、 鐵、 鉛 何れ V る。 の條下にも記されてゐる。 然るに新唐書地理志には次 唐代に於いては六典、 漳但 州し 通典 O 如

く記されてある。 福 州 福 唐 鐵 連江 (鐵) 尤溪(銀、 銅 鐵

建州 建安(銀、 銅 邵武(銅 鐵 將樂(金、 銀 鐵

泉州 南安(鐵

長汀(銅、 沙(銅、 鐵) 寧化(銀、

ح

れに依ると唐末盛

K ح

の地

方の鑛

山が

開發されたことが窺は

'n

る。

あって、 (8 に載 就中宋 せて あるが、 代になつて急に産額 これは抽分と和買とを合せた政府年收の統計である。 の 蜟 し 一路中第四位を占める。 たのは銀 である。 宋會要食貨第三 元豐元年には各路共に激減したに拘らず、 K は銀坑冶祖額と元豐元年收總計を各路 前者は熙寧末年の統計と考へられ 福建獨 るの 别

これに於いて福建は産銀十

増加して第一位に上り六萬九千兩、 州龍焙監 あることは 凡そ七場を管す。」とあり、 對 の條に、「本州の地銀鑛を出すを以て皇朝開寶八年場を置き銀銅を收む。 に元豐間 右 の事實を裏書きするものである。 諸 路 一節進奉銀 建安縣の銀は宋初には相當の產額があつた樣である。 0) 總收二十一萬五千餘兩の殆んど三分の一に當る。 條があり、 福建路が同天節及び南郊進 し かもその大部分は南剣州 奉銀丼せて三萬七千兩、 0 産出であつた。 太平興國三年昇せて龍焙監とな 文獻通考卷二 さうして寰宇記卷は唐代 太平寰宇記卷百 所引 諸路 畢 中 第 仲衍 建 位. O

す。

で

南劍州の産額が急激に増加し建州の方は減少したのであらう。 ない。 えないことを以てすれば、この監は或は元豐の初頃廢されたのではないかと考へられるのであつて、 から旣に銀産地として著はれてゐる尤溪、將樂、沙等の縣を管下に含む南劍州に就いては一言も鑛産に觸れてゐ しかるに南劍州の銀產額は熙寧末より元豐の初めにかけて當路の第一にあり、且元豐九域志に龍焙監 との頃には が見

んどすべてが南劍州の所産である。 どもこれに次いで第二位を占め、 宋會要食貨第三に依ると銅の産額に於いても、當時全產額の大部分を出した废南東路には遙かに及ばないけれ 主として福、 しかし鐵の產額は問題にならぬ程少なかつた。 建 南劍の三州に産した。鉛も全國屈指の産額を有してをつて殆

益々擴張せられ産額も一層増加したであらう。 建州建安縣の永興場を敷へてゐるのに依つてもわかる。 的の鑛産地を上げ、 た筈である。南宋になつても福建路が鑛業地として榮えたことは、文獻通考炎,所載嘉定中の臣僚の上言に代表 これ等の統計に依れば北宋時代南劍州は銀鉛の産額では全國で一二を爭ふ程に達し、 銅銀共産として建州浦城縣の因獎、南劍州尤溪縣の安仁、杜唐、供面子坑、 財源を求めるに急であつた南宋に於いてはこれ等鑛山は 有數の盛な鑛業地であつ 銀鉛共産として

使臣を擇んで銅を出し薪炭を得易きの處を按行せしめ監を增置して錢を鑄んと。乃ち虞部員外郎馮亮等に命じて 建州に監が置かれたのはとゝが産銅地である外に交通の便も考慮に入れられたものであらう。 て、「初め鑄錢たヾ饒州永平、池州永豐あるのみ。咸平二年宰臣張齊賢いふ。今錢貨いまだ多からず。望むらくは に至り豐國監を置き、 建は銅の産出が多かつたので咸平二年豐國といふ鑄錢監が置かれた。宋會要食貨冷中に淳熙九朝通略を引い 江州に廣寧監を置く。 云々」とあり、 以後毎年凡そ二十萬貫の銅錢 豐國監は南宋の初 が鑄造せ

it 1 十七史商権卷七十六臘面茶の條にこの舊唐書の臘に作るは誤りであるとして「臘當作蠟。原本誤同。」といひ、 が「其の茶を蠟茶といふは蠟面の意味にして其の色蠟の如く黃を帶びたるが故なるべし。」(滿鮮地理歴史研究報告第五 「北朱の對契丹防備と茶の利用」一六三頁)といはれ、共に根據を示されてないが、程大昌の演繁露續集卷五の次の文に

人多書蠟爲臘。云取先春爲義。失其本矣。」

據るの外はない。「建茶名蠟茶。爲其乳泛湯面。與鎔蠟相似。故名蠟面茶也。 楊文公談苑曰江左方有蠟面之號是也。 今

2 研膏茶のことは江少虞の皇朝類苑卷六十所引楊文公談苑に見え、龍鳳茶は宋史南唐世家に見える。

もつとも續資治通鑑長編(卷三百四十九)元豐七月十月の王子京の上言によると熙寧三年にはかりに全國的に通商を許さ

り1番単立とがあつた様である。

3

4 加藤博士はこの記事を李時珍の本草綱日より引用し、 る。「支那に於ける甘蔗及び砂糖の起原に就いて」(東亞經濟研究四卷三號) 福建の甘蔗栽培が唐代にまで 溯り得るで あらうと 想像されてゐ

(3) Marco Polo (Yule and Cordier P. 226) は福州から十五哩離れた Unken といふ町が最も砂糖の産出の多いことをい ので Vuguen 又は Unken といふ町には適當な地名が當嵌らないがどうしても福州附近でなければならぬ。 掲げてゐるが、これは到底成立しない。宋代廿藍の産地は福州附近では三山志卷四十一に、「候官廿蔗州最盛。」とある Pauthier が候官に當てたのを不可とし距離の上からは閩清の外なしといふ。尙別に永春縣を主張する Phillips といつてゐる。Moule et Pelliot 版(P. 155 r.)には Vuguen に作る。 これを何處に比定するかは 疑問で ユールは ひ、この町の人は以前は砂糖の精製法を知らなかつたが、元の領土に入つてからバビロニャ人が來て改良せられたのだ の説を

6 **疉山集忩五「謝劉純父惠木綿布」。趙鏁の陔餘叢考忩三十「木綿布行於宋末元初」の條參照。**

7 てある。然るに福建では新唐書以外には左様な例が一もなく又食貨志等にも獨立して現はれてゐる記事もない。あらゆ 鑟物を産するといふことゝこれを貢賦として上るといふことゝは別であるが、金銀の如きは少しでもこれを産する州郡 二分册五〇二頁參照 る情勢から推してこの地方の鑛山は多く唐末より開かれたものであらう。加藤博士「唐宋時代に於ける金銀の研究」第 は皆これを貢賦としてゐることは通典卷六に見える通りであり、銅鐡にしても有名な鑛山は元和郡縣志には一々記載し

8 日野開三郎氏は「北宋時代に於ける銅鐵の産出額に就いて」なる論文(東洋學報二十二卷一號)に於いて、 宋會要坑冶部

9 域志に記されてないことと併せ考へれば恐らく元豐の初年に廢されたのであらう。次に宋會要に見える銀産額の統計表 この寰宇記に見える龍焙監を加藤博士は太平寰宇記産銀地表に脱してをられる様である。龍焙監は續査治通鑑長編卷九 所に龍焙監舊置とあり、 に見える銅の元額を考證して熙寧八年より十年に至る三年の平均と認めてゐるが、銀の場合も同樣であらう。 七天禧五年現在の産銀地の中にも見えるが、この監に關する最後の記事は宋命要食貨(第三十三)の坑冶監場を記した これは熙寧十年までのことを記した六朝國朝會要に依つたものと思はれるからこの監は元豐九

(11) 史學雜誌四十 宋會要に見える鉛産額 邵武軍 南劍州 熙寧末年 熙寧初年 元豐元年 全國 24 四、六四四五 11四二〇 二、五六一〇 銀坑冶元額 **1**0二七七 二三一、五八七四斤? 四〇七五 〇九、五四五九 一六四〇兩 九七、二一六二 1二九〇 五五〇 建 二一、五三八五 六、九〇〇〇 五二二二七 元豐元年收 二九〇一 八八一二 二八二一兩 011110 八九、五六八〇 九〇、三〇四五 九 一 五 州 九一九、七三三五 八三二、六七三七 七九四、三三五〇 國

年の鑄造額を上げてゐる。尙建炎以來朝野雜記甲集卷十六に依り「大觀中豐國二十四萬四百」とあるのを補ひ得る。 六編一號所載日野開三郎氏「北宋時代に於ける銅鐵錢の鑄造額に就いて」には宋會褒に依つて知り得べき

計

輸送し 見雪。 船 る。 らう。 で る容船も通じてゐたことがわかり、 によれば當時福建は港として相當に發達しこの地で海 て らん。天子磻石を召見す。 て糧を運ぶ、 福建の海岸に來て通商したこと、 として史上に現はれるのは唐の中期以後である。文苑英華七十一 君赴泉州」といふ詩に「傍海皆荒服。 あつたとみえ、 废 一隻千石を致すべし。 古くから福建の海岸が南海航路の寄航地として利用されたことはいふまでもないが、福州や泉州が國際貿易港 府に至るべ 舊唐書懿宗紀咸通三年五月の條に、 到 た時水運 桑原博士は 處即行春。」とある。 軍 師を濟はず。 の不便に苦しんだことをいひ、「潤州の 唐大和上東征傳に依ると鑑眞は第四回目の東征の時に杭州から使を出し輕貨を携へて福州へ舟 「蒲壽庚の事蹟」の中に於いて諸種の適確な證據を上げて、 云々し 福建より船を装へば一月ならずして廣州に至る。 因て奏す。 とあり、 士卒食盡くればすなはち散ず。これ宜しく深慮すべし。 泉州が海外交通の一門戸に當り諸外國貢使の來朝が頻繁なことをいつたものであ 中にも泉州は最も早く彼等蕃客の爲に 開かれた港で あることを 證明されてゐ アラビヤの商人がやつて來て貿易に從事した事情も明かとなる。 この計は採用せられて嶺南の康承訓 臣が弟聽思會て雷州刺史に任ず。家人海船に隨つて福建に至る。 分符重漢臣。 南蠻が交阯に寇したので湖南より湘江を溯つて灕水を下り 雲山百越路。 舶に乘降する人も多かつたらしく、 人陳磻石闕にいたり上書していふ。 所載、 市井十州 の軍は食糧難を免れたことがある。 唐の大曆時代の人である包何の「送李侍 船敷十艘を得ばすなはち三萬石を致 人。 唐の中世以後アラビヤ商 執玉來朝遠。 臣奇計あり、 廣州と福建とを連絡 江西湖南より流を泝 環珠入貢頻。 を選出 以て南軍に饋 造船業も盛 往來の大 へ軍 人が盛 連年不 され 0

さて宋代になるとこの地の外國貿易に關する記事は頗る多い。

宋初から外舶の泉、

福、

漳の諸州に入港するも

章を授かつてゐる。② あつた。 を買ひにやつた。太平寰宇記の福州や泉州の土産の條には海舶がある。 貞元二十年弘法大師が漂着したのは別として、大中七年入港した智證大師は開元寺で一天竺僧から悉曇 當時この港と九州の間を往來した支那商人は相當にあつた樣である。 叉福州は日唐交通の上にも重要な關係

が

であらう。五國故事管 には泉州に知した 王審知の兄 審邽と子の延郴の三十年間の ことをいひ「乃ち歳豐稔なら 招來は相當の成功を收めたであらう。 その時多數の外國商人が殺戮せられ市街は荒廢に歸し西方との交通が一時衰徴した時であつたから、 類といふといへども亦華風を慕ふ。 どは旣に述べた。瑯琊忠懿王德政碑に、「佛齊國照臨を同じくすといへども、冠裳を襲ぬるなく舟車通ずること罕に 據つたときからであらう。 從効は盆 ば毎に蠻船を發す。 ビヤ人であるべく、 軍を授く。」とあるのは德政碑の佛齊國云々 とに前聞を繼ぐべし。」とある。王氏が閩に據つたのは、 して賝晝獻ずるなし。 しかしアラビヤ商人が盛にやつて來て福州や泉州が貿易港として急激に發展したのは恐らく唐末王氏がこゝに 々貿易を奨勵しその收入に依つて獨立を維持してゐたと想像される。 失墜するものなし。人よつてこれを招寶といふ。] とある。五代が亡んだ後 泉州を保つた 留 王審知の招來に依つてその地の商人が入朝しその推薦で唐の朝廷から將軍號を授けられたの □者も亦滄海を踰えて鴻臚に來集す。 王審知が海中の蕃夷商賈を招來し或は甘棠港を開いて船舶の出入を容易にしたことな 宛土の龍媒いづくんぞ獨り往史に稱せられるのみならんや。 唐會要育に「天祐元年六月福建道佛齊國入朝進奉使都蕃長蒲訶粟に寧遠將 の記事に應ずるものである。 廣州が黄巢に陷つて間もない頃で ソレイマンに依れば③ これ乃ち公示すに中学を以てしその内附を致す。 佛齊國の蒲姓といへば恐らくアラ 條史の雀卵まと 王氏の海商 異

宋の元祐二年泉州に置かれ、その官制は屢々變化したけれども、 のが多かつたことは宋會要食貨等に散見する。從つて蕃商のとゝに滯在する者が增し、 ること八十。生齒無慮五十萬。」と稱したのは宣和二年のことであつた。⑤ になつて宋末に及んだ。元祐以來泉州の貿易は愈々繁榮に趨き、 でゐたであらう。 に航し貿易に從事してをつたので旣に熙寧の頃から泉州に市舶司の設置が朝議に上つてゐた。 泉州刺史陸藻が、「泉は京師を距つる五十有四驛。 紹興十二年から専任の提擧市舶が任ぜられる樣 政和宣和の頃には已に兩淅即ち杭州や明州を凌 海外の國三十有六島を連ね。 この地の商人も頻りに海 結局市 城内坊を畫 舶司 は

來よう。南宋時代沿海の州軍では食料の不足を廣州からの米で補つてゐた。これ等の事情は當然海外貿易を促し、 熙寧末年の各路墾田の頃數燈と、各路の主客戸統計―― とを載せてゐる。これに依れば福建路は墾田 闘くなし。州南海あり浩として窮りなし。每歳舟を作つて異域に通ず。」といつたが、 大體山が多く 土地 ţ 暦二年泉州の商人邵保といふものが私財を投じ人を募つて 海賊を占城まで追つて行き 捕へ歸つた 話を載せて あ 彼に留つて事を用ふるものあるを聞く。 自今その親戚所在に於いて 自から陳ずるを許し 招討司をして 招識 更に海外移住をさへさせたであらう。又狡猾な商人の中には脫稅等の目的を以て好んで海外に居を構へたものも ては第十四位にありながら戸敷は第六位を占めてをるのであつて、以てこの地方の生活狀態を想像することが出 な福建路は北宋時代から人口に比して耕地が少なく農家の生活は困難であつた。文獻通考には中書備對に依つて 嘉祐時代の人である謝履は泉南歌を作つて、「泉州は人稠にして山谷瘠す。就いて耕さんと欲すといへども地 もし能く自から歸へるものは班行を與へん。」といつて歸國を獎勵してゐる。司馬光の涑水記聞宗 續資治通鑑長編卷二百 熙寧九年三月の條に、「詔す、福建廣南の人商賈によつて交阯に至る。 の數に於い には慶 ō 或は せし Ō

賜興の幾分を貪る樣な惡辣なものもあつた。 ® 占城や高麗へ頻りに出かけて行つた記事が散見する。 る。 との地 方の商人の海外發展の勢は如何にも驚くべきものがあつたわけで、續資治通鑑長編には泉州の商人の 商人のみではなく船の乘組員として東南海上に活躍してをつた福 中には高麗の商人と結托して彼等に貢使と稱せしめ朝廷 O

人は一層數が多かつたことゝ思はれる。

がこ 營むものも少なくなかつた。宋末より元初にかけて泉州の繁榮は頂點に達した。 や明州が屢々宋金交戰の巷となつたことも忘れてはならない。 をも凌駕する樣になつて來た。北宋末の戰亂にもこの地が比較的兵火の害を被ることが少なかつたのに反し杭州 ンの名の下に世界最大の貿易港として記されてゐることなど更めていふ必要もあるまい 南宋になると貿易港としての泉州は遙かに兩浙を壓し杭州に近いといふ地の利をも占めて益々榮へ次第に廣州 ムに群居して貿易業に從事し、 その多數を占めるアラビヤ商人の中には鉅萬の富を擁して頗る豪奢な生活 泉州城の南郊には蕃坊が設けられ黑白數多の蠻 7 ル **=** ポ 1 п 0)旅行記 配にザ を 人

註 廣東の衰微」(歴史學研究六卷七號) をも参照した。 1 資治通鑑卷二百五十にはこの記事を咸通四年七月の條にかけ、 有司の不正や風濤の爲にこの計畫の功が少なかつたこと

こゝでは全體に亙つて桑原博士の「蒲濤庚の事蹟」によつたことはいふまでもない。成田節男氏の「宋元時代の泉州の發達と

- 3 Reinaud; Relation des P. 64
- Voyages tom. I P. 12.

2

大正藏經第五十五

卷智證大師將來目錄。

松本博士「智證大師

| 將來目錄に就いて」(園城寺研究所收

- 4 藤田博士「宋代の市舶司及び市舶條例」(東洋學報七卷二號)
- **(5)** 興地 とある陸藻のことである。 紀勝卷百三十所引陸守修城記に依る。 陸守とは乾隆泉州府志卷十一城治の條に「宣和二年郡守陸藻築。外磚內石。」
- **6** この詩は輿地紀勝卷三十所引。 謝履の傳は八閩通志卷六十七に「字履道。惠安人。 嘉祐中第進士。」とある。

とあつてこの地方農民の生活は困難であつたらしく、 南宋初の方勻の泊宅篇卷中に丫七閩地狹瘠。而水源淺遠。其人雌至勤儉。而所以爲生之具。比他處終無有甚富者。云々」 ふのは農家に就いていつたもので、 大地主の如きも發生しなかつたであらう。この路が上供の多いのに比して雨稅が 一路の生活を維持するものは商工業であつたらう。無有甚富者と

7 真文忠公文集卷十五「申樞密院乞修沿海軍政」に「又福泉興化三郡全仰廣米。」とあり、 にも「兼福興漳泉四郡全靠廣米。」と見えてゐる。 同卷「申尚書省乞措置收捕

少ないのは耕地の面積が少ないからである。

⑧ 續資治通鑑長編卷四百六十五。

七

はる美なりといふべし。」と述べてゐる。王應麟も困學紀聞四「に、「閩俗中州に比べて善に化すなり。① 朝に至り草木の異は則ち﨟茶荔子を産す。 宋人にとつてもこの間の變化には驚くべきものがあつたであらう。 和な宋代になると年一年と完全な生長を遂げ北宋の末に於いては旣に各方面共に可成り成熟の域に達した。實際 個 れた福建の開發は唐の中期に及んで漸くその緒に就き、唐末五代の間に於いて劃期的な發展をなした。これが平 いた場合も少なくなく、しかも尙叙述の橫道にそれたことも多かつた。こゝに結論を述べれば、 × 以上唐宋時代に於いて福建地方が如何に開發せられたかを各種の方面から論證した。內容が多岐に亘つた爲、 の問題に就いて十分な解決點に到達し得なかつた所があるのは遺憾である。 人物の秀は則ち狀頭宰相を産す。 北宋末の宋子安は東溪試茶錄の序に、「七闡國 皆前代未だあらざる所。 紙數の都合から一々の證據を省 從來著るしく後 時を以て顯

に過ぎて惡に化すなり。」といつてをる。この地方に赴任する官吏に對する送別の詩などを見ても唐と宋とでは餘の過ぎて惡に化すなり。」といつてをる。この地方に赴任する官吏に對する送別の詩などを見ても唐と宋とでは餘

增加 考 十卷 三二 程趣 ず、 尉 宋は北宋に比して領土は半減したけれども、 か 0 してこの地方の富は急激 して士大夫に親しまれ、 重要な財源地帯となつたので、 地 色きが 軍 政府の費用はたゞ闖浙等數路の出す所に俟つといふ有樣であつた。かくの如く南宋の初からこの地方は政府③ を計つたので、その歳入は北宋の盛時に匹敵することが出來た。 元來宋代の狀態をもう少し書く積りであつたが紙敷の制限と時日の切迫の爲他の機會に讓ることとする。 に重和元 に要する費用は莫大であつた。 *遠ふ。 年 宋になると氣瘴癘だとか俗兇暴だとかいふ樣な形容は餘り目に觸れないで、 ö 諸 路 雪を知らぬ南國の風物は彼等の心を惹きつけるものがあつた。 上供 に増加し已に北宋の末に於いては東南六路に次ぐ富裕な地方となつた樣である。 . 錢物の數を上げてゐる中に、 表面に現はれる文化の華やかさに反して寧ろ疲弊の聲さへ聞 兩准、 湖廣、 富饒な東南地方に據つてゐる上に種 四川の財賦は軍の稟給を主る總領所に專斷されて上供に屬 福建路が第六位を占めてゐるのは注目するに足る。 しかしその大部分は軍費に食は 々の 新税目を設けて極力收 諸々の産業は大い 建茶や茘子の産地 えてゐるではな れ殊に國 文獻通 に發達 入の 南 ¥.

註 2 1 蔡州が特に唐の中頃以來風俗の悪くなつたことに就いては顧祖禹が讀史方輿紀要卷五十に論じてゐる。 郡務讀書志卷十二所引。東溪試茶錄 著者の 名は讀書志には朱子安とあるが百川學海本及び宋史藝文志に宋子安とあるを正しいとする四庫提婯に從ふ。 一卷は百川學海や說郛局九十三に 收められてゐるが その何れにも この文は 見えな

(3) П Щ 集卷十一、十七の諸條、 .堂群書考索續集卷四十六所引陸溶の館職策に依る。 或は止齋先生文集卷二十「吏部員外郎初對劄子第三」等に見える。 總領所のことは同書卷四十五 「今日總司之財」、建炎以 來朝野 記

留 記 本編は昭和十)た諸先生の賜に外ならぬ。(昭和十四年二月十五日 年 大學に於ける卒業論文の 一部である。若しこれが何等か益する所ありとすればそれは全く指導を辱